

平成18年 10月4日	<b>農作物病虫害発生予報</b> <b>10月</b>	山口県病虫害防除所 山口県農業試験場
----------------	---------------------------------	-----------------------

～目次～

予報の概要	1
予報	
【主要病虫害】	2
【その他の病虫害】	7
病虫害・農薬情報	
病虫害メモ - ダイズ収穫時の紫斑病対策	8
侵入警戒病害～イチゴ角斑細菌病～	8
参考(予報の見方、気象予報、10月のテレホンサービスの内容)	9

予報の概要

農作物名	病虫害名	予想発生量	現況	
			平年比	前年比
カンキツ	かいよう病	<b>多</b>	多	前年並
	ミカンハダニ	平年並	平年並	前年並
果樹全般	カメムシ類	<b>やや多</b>	やや多	少
ハクサイ	軟腐病	平年並	平年並	前年並
	白斑病	やや少	平年並	前年並
	べと病	やや少	やや少	前年並
	黒斑病	平年並	平年並	前年並
アブラナ科野菜	コナガ	平年並	平年並	多
	オオタバコガ	<b>やや多</b>	やや多	少
野菜全般	ハスモンヨトウ	平年並	平年並	少

作物	担当者
普通作	野崎(病害) 中川浩二(虫害)
果樹	藤村(病害) 殿河内(虫害)
野菜	岡田(病害) 岩本(虫害)
茶	中川浩二(病虫害)

お問い合わせ先	
TEL	(083) 927-4006
FAX	(083) 927-4071

# 予報

## 【主要病害虫】

### カンキツ

#### 1 かいよう病

##### (1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	前年並	台風の影響前

##### (2) 予報の根拠

ア 9月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は59.1%(平年21.3%)、発病果率は6.7%(平年3.3%)、発病度2.1(平年1.1%)で、平年に比べ多かった(+)

イ 気象予報では、10月の気温は平年並みか高い(±~+)

##### (3) 防除対策

###### <防除判断>

すでに発病しているほ場やあまなつ、いよかん等発病しやすい品種では、台風の影響前に薬剤防除を実施する。事前に防除ができなかった場合には、台風通過後、なるべく早く防除を行う。

なお、温州みかんでも発生が多いほ場があるので注意する。

###### <耕種的防除等>

ア 秋に形成された病斑(潜伏病斑を含む)は翌年の有力な伝染源となるので、本病の発生しやすい夏秋梢はできるだけ除去する。

イ 防風樹や防風網を適正に管理し、枝葉や果実に傷が付くのを防ぐ。

###### <防除のポイント>

ア 温州みかんなどかいよう病に比較的強い品種でも多発することがある。特に発病しやすい品種との混植園や近くに発生園がある場合には注意する。

イ コサイドDFやZボルドーなどの無機銅水和剤を散布する場合は、薬害を防ぐため炭酸カルシウム水和剤(クレフノン)200倍を加用する。

#### 2 ミカンハダニ

##### (1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	防除判断参照

##### (2) 予報の根拠

ア 9月下旬の巡回調査では、発生ほ場率22.7%(平年25.0%)、寄生葉率

3.6% ( 平年 3.3% )、10 葉当たり雌成虫数 0.2 頭 ( 平年 0.9 頭 ) で平年並みであった ( ± )。

イ 気象予報では、10 月の気温は平年並みか高く、降水量は平年並みか少ない ( ± ~ + )。

(3) 防除対策

< 防除判断 >

防除の目安は、寄生葉率が 30 ~ 40% 以上、または雌成虫密度が 1 葉当たり 0.5 ~ 1 頭以上である。

< 防除のポイント >

ア 発生量はほ場によって大きく異なる。定期的にはほ場を見回り、発生状況を確認する。

イ 葉裏までムラなくかかるよう十分な薬量を散布する。

果樹全般

1 カメムシ類 ( チャバ 初カメシ、ツアカメシ、クサキカメシ )

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	少	園地への飛来を確認した時

(2) 予報の根拠

ア 予察灯の誘殺数 ( 県内 6 か所、9 月 1 半旬 ~ 9 月 5 半旬合計 ) は、174 頭 ( 平年 136 頭 ) でやや多かった ( + )。

イ 気象予報では、10 月の気温は平年並みか高い ( ± ~ + )。

(3) 防除対策

< 防除判断 >

園によって飛来の程度の差が大きいため、特に山間部や山沿いのほ場では飛来状況を確認して防除する。

ハクサイ

1 軟腐病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	8 葉期 ~ 結球初期

(2) 予報の根拠

ア 9 月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は 0% ( 平年 3.1% )、発病株率 0% ( 平

年0.2%)で平年並みであった(±)。

イ 気象予報では、10月の気温は平年並みか高く、降水量は平年並みか少ない(±)。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

排水溝を設置するなど、排水対策を徹底する。

<防除のポイント>

ア 発生後の防除では効果が劣るので、予防散布に努める。

イ 病原細菌は、風雨に伴う傷口や害虫による食害痕から侵入するため、台風前後の防除と害虫の防除を徹底する。

2 白斑病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	平年並	前年並	発生初期および結球初期以降

(2) 予報の根拠

ア 9月下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%(平年5.0%)、発病株率0%(平年2.7%)で平年並みであった(±)。

イ 気象予報では、10月の気温は平年並みか高い(±~-)。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

ア 連作、肥料不足等は発病を助長するため、イネ科作物との輪作、適正施肥に努める。

イ 風媒伝染するため、被害残渣は土中に埋める。

3 ベと病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	前年並	結球開始前まで

(2) 予報の根拠

ア 9月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は0%(平年15.4%)、被害株率は0%(平年6.4%)で平年に比べやや少なかった(-)。

イ 気象予報では、10月の気温は平年並みか高く、降水量は平年並みか少ない(-)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

- ア 結球開始前までの防除を徹底する。
- イ 同一薬剤の連用及び同一系統の薬剤間での輪用は避ける。

#### 4 黒斑病

##### (1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	発生初期

##### (2) 予報の根拠

- ア 9月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は0%(平年11.1%)、被害株率は0%(平年1.2%)で平年並みであった(±)。
- イ 気象予報では、10月の気温は平年並みか高く、降水量は平年並みか少ない(±)。

##### (3) 防除対策

###### < 耕種的防除等 >

- ア 肥料不足で発病を助長するため、適正施肥に努める。
- イ 風媒および雨媒伝染するため、被害残渣は土中に埋める。

### アブラナ科野菜

#### 1 コナガ

##### (1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	多	若齢幼虫時

##### (2) 予報の根拠

- ア 9月下旬の巡回調査では、ハクサイでの発生ほ場率は12.5%(平年6.0%)、10株当たり虫数は0.1頭(平年0.1頭)で平年並みであった。キャベツでの発生ほ場率は20.0%(平年12.1%)、寄生株率は0.2%(平年0.5%)で平年に比べやや少なかった(-~±)。
- イ 農試内のフェロモントラップにおける9月の誘殺数は、平年並みであった(±)。
- ウ 気象予報では、10月の気温は平年並みか高く、降水量は平年並みか少ない(±~+)。

##### (3) 防除対策

###### < 防除のポイント >

- ア 有機リン、ピレスロイド、IGR系の薬剤はコナガに対する効果が低い場合

があるので、薬剤散布後は効果を確認し、効果が十分ではない場合は他の薬剤（BT剤やスピノエース顆粒水和剤、アフーム乳剤等）に変更する。  
 イ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

## 2 オオタバコガ

### (1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	少	若齢幼虫時 (9月6半旬～10月2半旬)

### (2) 予報の根拠

ア 9月下旬の巡回調査では、ハクサイでの発生ほ場率は0%（平年3.3%）、寄生株率は0%（平年0.1%）で平年に比べ少なかった。キャベツでの発生ほ場率は0%（平年7.1%）、寄生株率は0%（平年0.4%）で平年に比べ少なかった（-）。

イ 農試内のフェロモントラップにおける9月の誘殺数は平年に比べ多く、台風13号通過後～9月末までの誘殺数は平年に比べやや多かった（+）。

ウ 気象予報では、10月の気温は平年並みか高く、降水量は平年並みか少ない（±～+）。

### (3) 防除対策

#### < 耕種的防除等 >

定期的にはほ場を観察して早期発見に努め、幼虫を見つけ次第、捕殺する。

#### < 防除判断 >

山口農試内のフェロモントラップ誘殺状況から、防除適期は9月6半旬から10月2半旬と推定される。

#### < 防除のポイント >

ア 生長点を食害されると被害が大きいため、特に結球前の薬剤散布を徹底する。

イ 中齢以降の幼虫は結球に食入するので、若齢幼虫時の防除を徹底する。

ウ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

## 野菜全般

## 1 ハスモンヨトウ

### (1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	若齢幼虫期 (10月中旬～11月)

(2) 予報の根拠

- ア 9月下旬の巡回調査では、ハクサイでの発生ほ場率は25.0%（平年19.8%）、寄生株率は1.5%（平年0.6%）で平年に比べやや多かった。キャベツでの発生ほ場率は20.0%（平年35.9%）、寄生株率は0.8%（平年3.3%）で平年に比べやや少なかった（±〜+）。
- イ 県内のフェロモントラップ（6か所）における8月5半旬～9月4半旬の誘殺数は地域によってばらつきがあるが、全体的に平年並みであった（+）。
- ウ 気象予報では、10月の気温は平年並みか高く、降水量は平年並みか少ない（±〜+）。

(3) 防除対策

< 耕種的防除等 >

- ア 地域により発生量にばらつきがあるので、ほ場をよく観察し、若齢幼虫の集中した葉は見つけ次第捕殺する。
- イ イチゴ等の施設栽培では、葉の裏や鉄骨、パイプ等に産卵することが多いので注意し、黄褐色の毛に覆われた卵塊を見つけ次第捕殺する。

< 防除判断 >

10月から11月にかけて若齢幼虫がだらだらと発生すると考えられるので、定期的にはほ場を観察し、必要に応じて防除を実施する。

< 防除のポイント >

- ア 中～老齢幼虫には薬剤の効果が悪くなるので、若齢幼虫時の防除を徹底する。
- イ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

山口県農林業情報システム

誘殺ピーク	10月					11月															
	1	5	10	15	20	25	1	5	10	15											
6月23日	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
7月10日	A	A	A	A	-	-	-	-	-	-	@	@	@	@	@	@	@	@	@	@	@
7月16日	+	+	+	+	A	A	A	A	A	A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

予測日 2006年 9月 29日

凡例	A: 成虫	-: 卵	o: 幼虫	+: 蛹	@: 防除適期
	主要な飛来	多飛来	並飛来	少飛来	

図 ハスモンヨトウの防除適期予想図

【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予想発生量	現況		発生ほ場率		備考
			平年比	前年比	本年(%)	平年(%)	
キャベツ	黒腐病	平年並	-	-	-	-	強風・大雨前後に防除
アブラナ科野菜	ウワバ類(キャベツ)	やや多	やや多	前年並	20.0	8.6	
野菜全般	アブラムシ類	平年並	平年並	少	-	-	山口市の黄色水盤による9月4半旬～6半旬の誘

							殺量は平年並みであった。
	シロイチモジヨトウ	少	少	少	-	-	山口市のフェロモントラップによる9月の誘殺数は平年に比べ少なかった。

## 病害虫・農薬情報

### 病害虫メモ

#### ダイズ収穫時の紫斑病対策

ダイズ紫斑病の発生は、県内の主要品種が「ニシムスメ」から紫斑病に強い「サチユタカ」に移行したことにより減少し、現在では大きな問題になっていません。しかし、収穫が降雨の多い時期にずれ込むと多発生を招くことがあるので注意が必要です。

紫斑病菌が莢に感染するのに適した時期は、開花期後12～40日頃です。開花期後40日頃以降は、莢に侵入した菌糸が成熟期までに莢の内側の表皮へ到達できないため子実(粒)への感染が極めて少なくなります。現在登録のある農薬は主に感染防止効果が高いことから、開花期後40日以降は、農薬を散布しても効果が発揮できません。つまり、7月30日に開花期を迎えたほ場では、9月10日頃以降に薬剤を散布しても期待した効果が得られないのです。

ダイズの子実(粒)における紫斑病の発生は、一般には成熟期前15～20日頃(莢が黄色に色付く頃)から始まり、成熟期に近づくにつれて急増します。また、成熟期(ニシムスメでは7月30日に開花期を迎えた場合10月25日頃が成熟期)以降も降雨が続く場合には、紫斑病の発生は急増し続けます。

これらのことから、今からできる最も重要な紫斑病対策は、「適期収穫(収穫適期内の早期の収穫)」と「収穫後の速やかな乾燥」なのです。

なお、コンバインによる収穫適期は、成熟期後7～25日とされていますが、同様の理由で早めの収穫が大切です。

(専門研究員 野崎 匠)

#### 山口県で侵入を警戒している病害 ～イチゴ角斑細菌病～

本病は細菌によって引き起こされる病害で、主に葉に病徴が現れます(図1、2参照)。本病が広がる主な原因は保菌苗の持ち込みであり、病斑から流出した病原菌が水滴とともに飛散し、2次伝染します。ハウス栽培では発病が下～中位葉に留まるため、大きな減収要因にはなりません。露地栽培の親株床や育苗床などでは、葉全体が枯れるなど大きな被害が発生する可能性があります。

本病が疑われる症状は、平成15年～16年に周南市(熊毛)、岩国市(旧市、玖珂)、光市(大和)、平生町、柳井市において認められています。上記のような症状が認められた場合は、病害虫防除所までご一報ください。



【防除対策】

- ( 1 ) 発生が疑われるほ場では、翌春の収穫終了後、見かけが健全な株を含めた全株を土中に埋めるなどして適切に処分し、次年度の親株として利用しない。
- ( 2 ) 頭上灌水を避け、水滴の飛散による伝染を防ぎ、葉を乾燥した状態に保つ。
- ( 3 ) 本病の登録薬剤は、コサイドDFとバリダシン液剤5であり、いずれも予防的に用いる。
- ( 4 ) 育苗期の雨よけ栽培やほ場の太陽熱消毒は、本病の発病抑制に有効である。



図1 葉裏の症状

葉脈に囲まれた部分に水浸状の角張った小斑点となり、後に褐変する。湿度が高いと病斑から菌泥が噴出する。



図2 葉表の症状

小斑点が多数発生すると、互いに融合して葉が枯れる。

( 研究員 岡田知子 )

参考

1 予報の見方

(1) 病害虫発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	〃 で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	〃 で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	〃 で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	〃 で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの）

(注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる)

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	〃 前年の評価より少ない発生
前年並	〃 前年の評価と同等の発生(上記2項目を除くもの)

(2) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

## 2 気象予報

### (1) 概要

1か月気象予報（9月29日福岡管区気象台発表）

予 報	高 い(%) 多 い	平年並(%)	低 い(%) 少 ない
気 温	4 0	4 0	2 0
降 水 量	2 0	4 0	4 0
日照時間	4 0	3 0	3 0

週ごとの気温傾向

予 報	高 い(%)	平年並(%)	低 い(%)
1 週 目	3 0	5 0	2 0
2 週 目	4 0	4 0	2 0
3 ~ 4 週 目	4 0	4 0	2 0

### 3 10月のテレホンサービスの内容（予定）TEL(083)927-4649

時期	内 容
上旬	10月の発生予報、カンキツ病害虫の防除、ナシ黒斑病の防除、トマト黄化葉巻病対策
中旬	野菜病害虫の発生状況と防除、トマト黄化葉巻病対策
下旬	ダイズ収穫時の紫斑病対策、野菜病害虫の発生状況と防除、ムギの種子消毒